

Light the Olympic flame

第2部

子供たちへ



# 自分のために、ボランティア

ボランティアという行為の意味を、子供たちにどう伝えるかは難しい。「誰かのため」で終わるものでもなく、「自己犠牲」を強いるものでもない。

東京五輪は参加する約8万人の一人一人が自問し、答えを探す場になるだろう。

プロジェクターが白布の上  
に映し出したのは、駅の写真  
だった。それまでおとなしく  
膝をそろえていた子供たちが  
声を上げる。

「ここ知ってる!」

「そう、皆さんが利用する  
JR吉祥寺駅ですね」

1月中旬、東京都練馬区立  
立野小学校の体育館。マイク  
を手に、元日本航空客室乗務  
員の江上いずみが優しい声で  
続けた。

切符の買い方や目的地まで  
の経路が分からず困ってい  
る、そんな外国人旅行者を見  
かけたら」。

「恥ずかしがらずに、声を  
かけてくださいな」

心得顔の高学年と目をきら

## 2 中高校生が受け継ぐ

### 東京五輪・パラリンピックの 主なボランティア内容 ※18歳以上

- 観客らの案内、チケットチェック
- 外国選手団のコミュニケーション支援
- 競技・練習会場での運営の支援
- けが人の対応、ドーピング検査の支援
- 表彰式で選手らを案内、メダルの運搬
- 記者会見の準備・運営



握手の仕方を学ぶ児童ら。将来の担い手となるか

指導する江上いずみ=八王子市立第四小学校

さらさせる低学年。江上の言  
葉は子供たちの胸にすんと  
落ちたようだ。「受け身にな  
らず自分から。おもてなしも  
東京五輪・パラリンピック

ボランティアも基本は変わら  
ないと思います」と江上は言  
の開催決定を機に、「おもて  
なし学」の講義は全国の中小  
高校で展開されている。東京  
都の公立校では平成28年度か

ら、年35時間程度の五輪教育  
を組み入れ、ボランティアへ  
の関心や日本人としての誇  
り、豊かな国際感覚などを子  
供たちの中に育もうとしてい  
る。

30年間で延べ約1万9千時  
間の搭乗歴を持つ江上は、7  
年前に独立し、おもてなしの  
プロとして活躍する。昨年は  
約250件の講義、講演をこ  
なした。東京五輪に向けて変  
わりゆく社会を肌で感じる。

1月は八王子市立第四小に  
も呼ばれ、おもてなし講座を  
開いた。知っているようで知  
らない、おじぎやハグ、握手  
の作法。6年生の松田華(12)  
は「どうすれば喜ばれるかを  
考えて行動したい」と意欲的  
だ。

### 自己犠牲でなく

東京五輪の大会ボランティ  
アは18歳以上だが、予備軍と  
なる中高校生や将来の担い手  
となる子供たちに、意義や価  
値を理解してもらうことは、  
五輪が残すべきレガシー(遺  
産)である。五輪は言うまで  
もなく、各地のスポーツイベ  
ントはボランティアの力を抜  
きに運営できないからだ。

原則として「1日8時間程  
度」「10日以上」、宿泊費な

どは自己負担。五輪のボラン  
ティア募集要項に対し、「ブ  
ラック企業か」などの批判が  
相次いだ。川村学園女子大教  
授の藤原昌樹(スポーツ社会  
学)は、ボランティアへの学  
生の関心は高いとしながらも

「単位や弁当支給などインセ  
ンティブがある活動に人気が  
ある」と指摘する。「ボラン  
ティア=自己犠牲」というイ  
メージが定着すれば、若者を  
遠ざけかねない。

大会組織委員会にボランテ  
ィア養成の知見を提供する日  
本財団ボランティアサポート  
センター事務局長の沢渡一登  
は「だからこそ、子供への教  
育が重要になる」という。学  
校にはノウハウが少なく、外  
部講師のニーズは高い。同財  
団が、組織委に子供を啓発す  
る冊子の作成を提案している  
のは、危機感の裏返しでもあ  
る。

東京五輪のボランティアに  
は約20万人の応募があった。  
20代が36%と最も多く、10代  
も14%だった。30代、40代は  
ともに13%、50代が14%。若  
者の意欲は、中高年に劣らず  
高い。

支える人も主役  
何のために。ラグビーワ

ールドカップ(W杯)日本大  
会が答えの一つを示唆してい  
る。試合後に観客とボランテ  
ィアスタッフがハイタッチを  
交わし、感動を分かち合うシ  
ーンは各会場で見られた。見  
る人も支える人も「主役」と  
いう実感を持ってもらおうた  
め、W杯の大会組織委が企画  
した。

静岡で会場運営を支えた慶  
大3年の山本紗彩子(22)は、  
「誰かのために」と参加した  
W杯でこう感じた。「自分に  
はない背景を持つ人たちと交  
流できた。ボランティアつ  
て、実は自分のためになる」

笹川スポーツ財団の調査で  
は、東京五輪のボランティア  
に「応募はしなかったが応募  
を検討した」が応募者(3  
%)の2倍弱の5・6%い  
た。応募をやめた理由は「仕  
事や学業との調整がつかな  
い」が多かった。

ボランティア休暇を採用す  
る企業は5%に満たない。  
「企業や学校の配慮が必要。  
そのうえで、ボランティアに  
従事する人が増えるのが理想  
だ」とは藤原の指摘である。  
レガシーとして残すために何  
が必要か。答えを求められる  
のは、社会の仕組みを作る大  
人だ。

敬称略